

当園におけるインドゾウの足ケアの一例

高橋文彦 古田洋 野口忠孝
清成真由 太田真琴 芦澤洋平
横浜市立よこはま動物園

よこはま動物園では、雄1頭、雌2頭のインドゾウを飼育している。1999年3月の入園当初よりトレーニングを実施してきた。現在、雌2頭は直接飼育を行っているが、雄についてはムストの兆候が見られ始めた2001年6月に、飼育担当者の安全確保のため、準間接飼育に移行した。

トレーニング内容は、ハズバンドリートレーニングを重視して行ってきた。早期な診断や治療の充実を図る事や、採血の馴致、皮膚のケアを目的とした年間を通しての体洗い等を実施している。その中でも、重い体重を支える足は負荷がかかり問題が発生し易いため、足ケアのトレーニングを優先的に行ってきた。

飼育している3頭は開園当初より足裏に黒い筋があった。その黒い筋に小石等が詰まって徐々に筋が広がり内層部へ深くなって行き、足裏の角質がスポンジ状になって浮き上がり、やがて剥がれてしまう。また、爪にも、ひび割れがあり、もっとも悪化した状態では爪の上層部まで至るほど、ひび割れが達していた事もある。

当園での足ケアは、パドックから寝室への収容時に、寝室に常設してある開口部へゾウの足を出させ、足裏、爪の洗浄や消毒を毎日実施している(雄は放飼時も実施)。また、2006年10月頃からトレーニングを更に充実させ、より良い改善策として足に悪影響を及ぼしている部分の切除が望ましいと考え、積極的に蹄を削るトレーニングを開始した。

当園では、蹄疾患への対処として、蹄を削る技術の向上と共に、床材や運動量等の飼育環境の改善や、肥満抑制や栄養素の不足等の給餌内容や量の見直し、また各個体によつての成長過程や癖(行動)を把握するなど、課題を改善して行かなければならないと考える。

そして、ゾウがストレスになり得る治療に対し、常に協力的な状況であるように、飼育担当者との良好な関係を築く事が大切であると思う。

様々な課題はあるが、定期的に蹄を削り形状を整える事で、爪のひび割れの進行や足裏の黒い筋の拡張を防ぐ事ができ効果的であった。

今回は、当園で取り組んできた足ケアの経過を報告する。